

ココロにサプリ

広報メディア研究所代表 上野 弘子

第118回

神戸から東北へ



急峻な山々の上空を飛行していた機体は、大きく旋回し、太平洋上へと出た。なだらかな弧を描く仙台湾と、その海岸線に沿って続く防潮堤が見えてくる。



青森のリンゴ農家の女性と角館町でバラの形のソフトクリームをつくる女性。Nov.6.2015

コンクリートで固められた巨大な防潮堤の上を、かすめるようにして飛行機は空港に滑り込んだ。平日の午前中のせいか、滑走路には他に航空機は見当たらず、ロビーもひっそりとしている。

寂しい…。それが、初めての仙台、初めての東北の第一印象だった。

東日本大震災が起こる前、この辺りには海水浴場があり、その手前には豊かな松林があったという。松林と空港の間には閑静な住宅街が広がっていたそうだが、今は、広大な更地の向こうに無機質な防潮堤と、哀しみに耐えるようにひっそりと佇む松の木が、わずかに数本見えるだけだ。

あの日、津波は、街と幸せな日常を無情にも流し去り、私たちは自然と対峙することの厳しさと、助け合うことの大切さを再認識させられた。

その時から5年が経とうとしている。しかし、この地区の沿岸部では防潮堤以



紅葉が美しい、みちのくの小京都・秋田県仙北市角館町。春の桜の美しさでも知られる。Nov. 5.2015

外、復興は進んでいないように見受けられた。

出迎えてくれたガイドの女性によると、住宅の一部は高台に移転し、海水をかぶった田畑は、まだ土の入れ替えをしているところだという。そして、自宅を失った多くの人々が、今も仮設住宅で生活をしているという。

「この地区のお年寄りは、タンス貯金をしている人が多かったの。だから、全財産を津波にさらわれ、自力での復興が困

もいる。国はそんな人の年金から介護保険料を引かないであげてほしい」と声をつまりらせた。

彼女自身は、家族と自宅は無事だったものの勤務先のバス会社は社屋とバスを全て津波で失った。仕事がなくなった彼女は、しばらくの間、ボランティア活動をしていたという。その後、復職したがガイドの仕事は今も少ないらしい。

「観光客が来てくれないから、どうしようもないの。東北がにぎわったのは、地震の年の夏に、東北へ行こう」という復興支援キャンペーンが行われた時だけ」と寂しそうに話した。

私は4日間で松島、蔵王、奥入瀬渓谷、平泉、十和田湖などを慌ただしく回ったが、どの観光地も土産物店も秋の紅葉シーズンというのに閑散としているのは驚いた。土曜の午後、並ぶのを覚悟で訪ねた中尊寺の金色堂でさえ、混雑は全くあっさり入場できたのは、喜ぶというより心配に

なった。こんな状態では、とても観光業は立ち行かないだろう。

震災後には頻りに伝えられていた被災地の情報も、今では耳にすることがなくなった。神戸においては知る由もない東北の現状を、今回の旅で垣間見たように思う。

東北は広く、豊かな自然にあふれている。春夏秋冬それぞれの楽しみがあり、海の幸、山の幸にも恵まれている。世界遺産や国宝、景勝地など見どころも多い。神戸から少し遠いのが難ではあるが、飛行機を利用すれば1時間半ほどだ。

間もなく5回目の3・11が巡ってくる。なかなか進まない復興に弾みをつけるためにも多くの人にぜひ、東北に足を運んでほしいと思う。

かつて、震災後の神戸に賑わいが戻ってきたとき、どんなに私たちは嬉しかったことが、その喜びを今一度思い出して、それが今の私たちにできる支援ではないだろうか。